

スポーツ少年団員の増加策に関する提案

2015年5月

公益財団法人埼玉県体育協会埼玉県スポーツ少年団

(団員の増加策に関するプロジェクトの報告)

目 次	ページ
はじめに	1
第 1 章 登録の推移から減少の傾向を見る	2 ~ 3
第 2 章 団員減少の原因・要因を探る	4
第 3 章 団員増加策の提案	
単位スポーツ少年団の取り組み	5
市町村スポーツ少年団本部の取り組み	5 ~ 6
埼玉県スポーツ少年団本部の取り組み	6 ~ 7
第 4 章 まとめに代えて	8
参考資料 スポーツ少年団とは	9

はじめに

埼玉県スポーツ少年団は、1964年の東京オリンピックを2年後に控えた1962年6月、日本スポーツ少年団が創設されたとき、全国でもいち早くその趣旨に賛同し創立しました。

あれから50有余年が経過し社会が変化する中、埼玉県スポーツ少年団は、指導者や母集団、関係者が一丸となり、常に“団員が主役”であることを念頭に置き活発にスポーツ活動を展開してきました。その目的は「スポーツを通した子どもたちの健全育成」です。そして、単位団や市町村本部の皆さんの努力の結果、今日では団員数、指導者数ともに日本一を誇るまでに成長しました。

しかし、近年、その成長に陰りが見えてきています。少子化や子どもたちを取り巻くスポーツ環境と人々の価値観の変化などが様々な問題を表面化させています。そうした中、今、最も喫緊に対応を迫られている問題が団員の減少です。いかにして減少を食い止め、増加に転じさせることが出来るか、将来へ向けて大きな課題となっています。

そこで、埼玉県スポーツ少年団は、2014年7月から本部内に「団員の増加策に関するプロジェクト」を立ち上げ、減少の原因・要因を探るとともに増加策を協議・検討してきました。また、協議の途中には県本部員をはじめ、市町村の本部長や関係者などからも多くのご意見やご提言をいただきました。

ここにプロジェクトがまとめた「団員の増加策」に関する提案は、そうした方々のご意見やご提言などを参考に作成したのですが、これで全てではなく、市町村の地域性や単位団の特色などを活かした独自の取り組みが単位スポーツ少年団や市町村スポーツ少年団本部で実施されることを期待しています。

「待っていても団員は入ってこない」というご意見をブロック本部長会議でいただきました。埼玉県スポーツ少年団は、単位スポーツ少年団や市町村スポーツ少年団と一丸となって、団員増加へ向けた取り組みを積極的に推進したいと考えています。そのため、提案は以下のように整理しました。

単位スポーツ少年団が取り組むこと

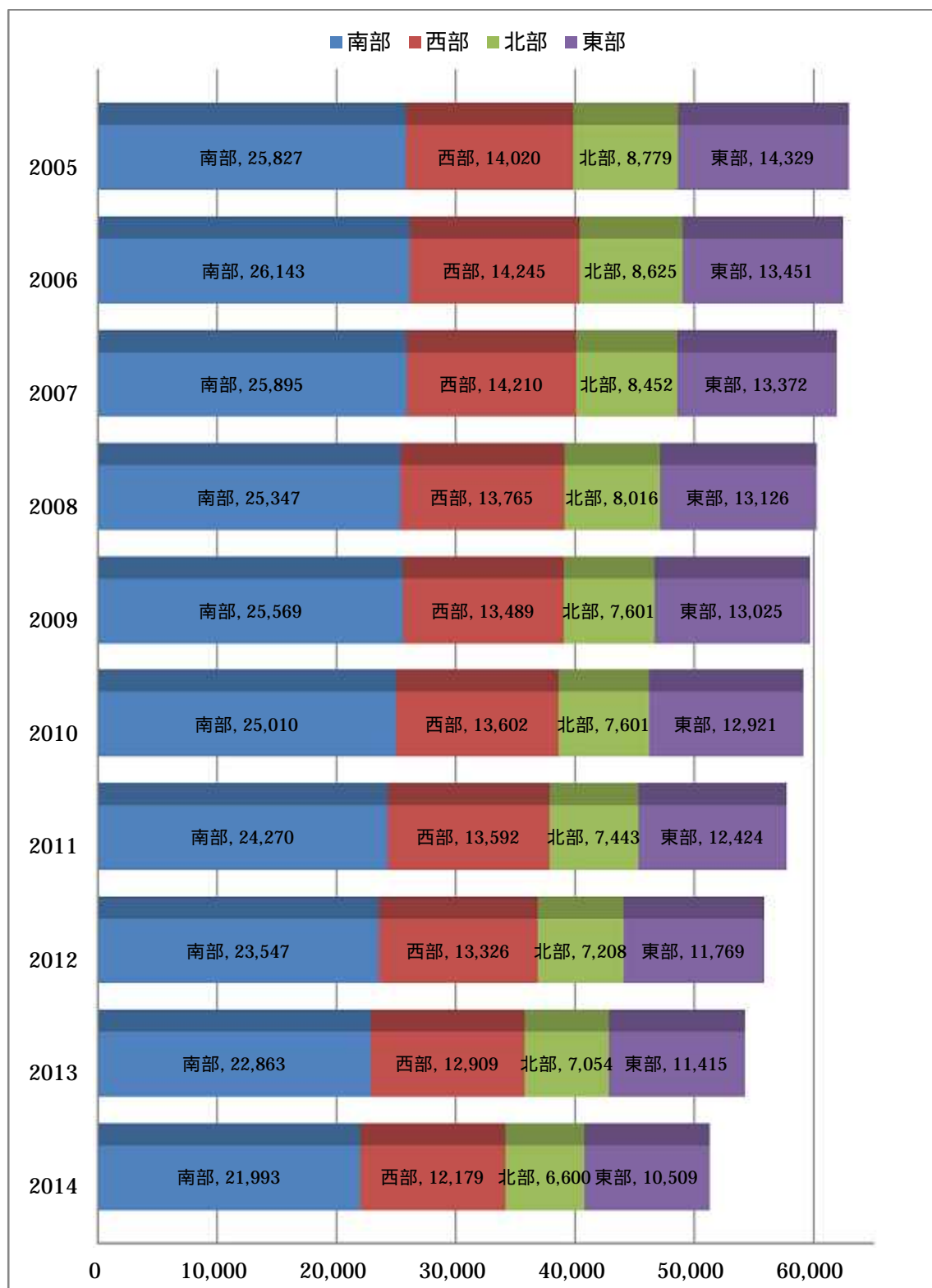
市町村スポーツ少年団本部が取り組むこと

埼玉県スポーツ少年団本部が取り組むこと

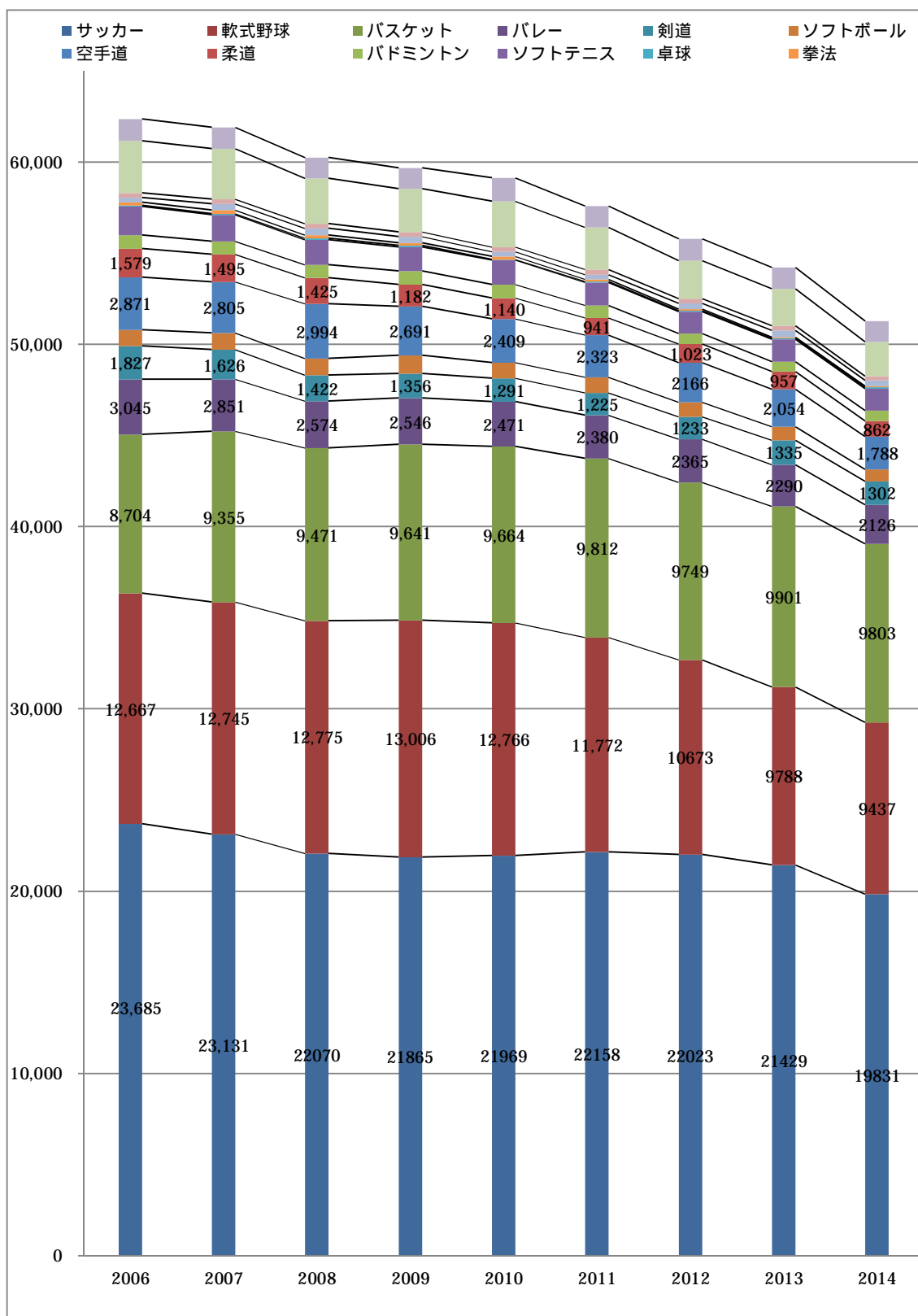
既に取り組まれている事柄も多いと思います。取り組みの内容を確認していただき、まだ未実施のことや、実施の効果がいっそう上がると思われることなどを参考にしてください。関係各位のご理解とご協力をお願いします。この増加策が「一人でも多くの子どもたちにスポーツの喜びを」を享受してもらう一助となり、団員の増加につながることを願っています。

第1章 登録の推移から減少の傾向を見る

2005年から2014年までの過去10年間の登録団員数の推移



2006年から2014年までの過去9年間の種目別登録団員数の推移



第2章 団員減少の原因・要因を探る

多くの皆様のご意見や報告から見えてきた主な原因や要因。

<子ども自身に関すること>

- ・少子化の影響で子ども数が減少した。
- ・子ども自身が習い事や塾などで忙しい。
- ・子どもの余暇時間の過ごし方が屋外から屋内へ変わり、ゲーム機やPCなどで時間を過ごす子どもが増加している。
- ・友達関係が入団・退団に影響している。
- ・週5日制の定着で土・日曜日の過ごし方が多様化している。
- ・幼稚園の延長で小学生になっても加入できるクラブが出来ている。

<指導者に関すること>

- ・指導者の競技偏重がみられる。
- ・競技団体や道場の試合に出られるのでスポーツ少年団に加入する必要はないと考えるスポーツ指導者がいる。
- ・一部の単位スポーツ少年団で試合に出られる小学高学年生のみを登録していて、低学年生を登録していない。
- ・高齢化と固定化が進んでいる。

<母集団 保護者に関すること>

- ・母集団の手伝いや当番が負担となり辞めていく子や、保護者の都合で入団させない場合もある。
- ・母集団・保護者と指導者の活動方針に対するズレが生じている。
- ・母集団活動の意義や役割が正しく理解されていない。
- ・共働き家庭が増え土・日曜に子どもと過ごしたい家庭が増えている。
- ・民間スポーツクラブへ保護者や子どもの関心が移行している。
- ・自己中心的な親が増えスポーツ少年団に対する考え方が変わった。

<単位団や市町村スポーツ少年団本部に関すること>

- ・一部の単位スポーツ少年団や市町村スポーツ少年団本部で行政や学校、地域の自治組織などの行事に参加せず、関係が良好でない。
- ・スポーツ少年団活動の意義や良さが理解されていないため、スポーツ少年団の社会的認知度や知名度が低い。
- ・小学生卒業と同時に卒団してしまい中学生以降の団員加入率が上がっていない。

第3章 団員増加策の提案

(1) 単位スポーツ少年団の取り組み

< 団全体で取り組むこと >

- ・ チラシやポスターなどによる様々な募集活動をいっそう推進する。
- ・ 学校や教育委員会、公共施設などの理解と協力を得て募集活動をする。
- ・ 地域行事や学校、市町村行事への参加と協力によるアピール活動を行う。
- ・ 低学年から高学年まで全ての団員を登録する。
- ・ PC を活用した募集や PR 活動を展開する。(HP 作成も)
- ・ 保護者の皆さんのスポーツ大会を開催し仲間意識を高揚させる。

< 指導者が取り組むこと >

- ・ 未加入者のための体験教室や見学会など団独自の行事を開催する。
- ・ 団出身の OB・OG (リーダー) やアスリートの指導・協力で活動の魅力向上を図り未加入者の入団を促進する。
- ・ 少人数団どうしの合同練習や参加可能な大会へ参加する。
- ・ 単一種目だけでなく幅広いプログラムで活動の魅力を向上する。
- ・ スポーツが得意でない子の入団を促進するため新しいプログラムと機会を用意する。
- ・ 子どもの人権を尊重し、意見や要望をプログラムに取り入れる。

< 母集団が取り組むこと >

- ・ 団員募集に最も効果的な口コミ作戦を全員で展開する。
- ・ 母集団の手伝いや当番などの負担をできるだけ軽減するよう役割分担の工夫をする。
- ・ 幼稚園や保育園などへも募集案内をする。

(2) 市町村スポーツ少年団本部の取り組み

< 広報・アピール活動 >

- ・ 市町村の広報紙やマスコミを活用して広報活動を展開する。
- ・ 様々な事業や PR 活動を通してスポーツ少年団の社会的認知度・知名度を上げる。
- ・ 市町村の行事 (体育祭、七つの子の祝い、ロードレース大会など)

に参加しスポーツ少年団をアピールする。

- ・スポーツ少年団活動の素晴らしさをアピールし民間スポーツクラブとの違いを広く正しくPRする。
- ・未加入の子どもたち向けスポーツ行事を行い、各単位団の紹介コーナーなどを設け、スポーツ少年団を知ってもらう。
- ・PCを活用した団員募集やPR活動（HPの作成）を展開する。

< 行政や学校との連携 >

- ・市町村教育委員会を通してスポーツ推進員と連携し、地域の行事に参加してスポーツ少年団への理解を拡大する。
- ・他の青少年団体と話し合い、互いに活動を理解し認め合って連携・協力を促進する。
- ・指導者・母集団・地域を一つにしたトータルマネージャーを養成し地域ぐるみの子ども育成を図る。
- ・小学校校長会や中学校校長会へ本部関係者が出席し、スポーツ少年団への理解を促進し団員募集（チラシ配布やポスター掲示など）の協力を要請する。

< 母集団の理解と協力 >

- ・母集団のスポーツ少年団への理解促進と自身の活動を支援する。
- ・母集団研修会の研修内容にできるだけ意見交換会を採り入れ他の単位スポーツ少年団の実情を学ぶ機会を作る。

< その他 >

- ・中・高校生のスポーツ少年団活動（リーダー活動）を推進し、登録を促す。
- ・単位スポーツ少年団の総会へ市町村スポーツ少年団本部関係者が出席し団員増加への協力を依頼する。
- ・スポーツ少年団出身のアスリートに協力してもらい行事を開催。
- ・就学前の子どもと親たちのためのスポーツ行事を企画・実施。

（ 3 ） 埼玉県スポーツ少年団本部の取り組み

県本部が直接取り組むことのほか、3つの委員会や指導者協議会での検討事項を記載した。県本部では検討結果を踏まえてできるものから実施する。

<本部直接の取り組み>

- ・母集団というネーミングについて日本スポーツ少年団本部に変更を検討するよう要望する。
- ・スポーツ少年団活動が子どもの体力・運動能力向上に寄与していることを機関誌や様々な機会を捉えて内外へアピールする。
- ・必要に応じてスポーツ少年団出身のアスリートを単位スポーツ少年団や市町村スポーツ少年団本部へ紹介する。
- ・小学校就学前の子どもの加入を検討する。併せて登録規定との関連があるので日本スポーツ少年団と協議する。
- ・多くの子どもがスポーツに関心を持ち、スポーツ少年団への興味を持ってもらえるような方策を研究する。

<指導者・リーダー育成委員会の取り組み>

- ・スポーツ少年団活動の良さや意義を指導者研修会でアピールする。
- ・中学生・高校生の活動継続（リーダー活動も含めて）を支援し、登録を促進するとともに日独同時交流事業への参加を促進する。
- ・地域社会や親たちの期待に応えられる指導者を養成する。そのため、指導者研修会のカリキュラムを検討する。

<企画広報委員会の取り組み>

- ・母集団のスポーツ少年団への理解をいっそう促進するため市町村の母集団研修会を充実させ、併せて研修内容を見直す。
- ・新聞、テレビ、雑誌など様々なマスコミを活用してスポーツ少年団を広くアピールする。

<活動交流委員会の取り組み>

- ・各種競技団体との連携・協力を促進するため各団体と個別に意見交換や交流を図る。
- ・団員数減少から複数の単位スポーツ少年団混成チームが種目別県大会に参加することについて検討する。

<指導者協議会の取り組み>

- ・指導者の勝利至上主義からの脱却を促進する方策を研究し広く周知する。
- ・認定員指導者の再研修においても団員数減少の現状を周知し、増加への理解と協力を促進する。

第4章 まとめに代えて

10年前の2005年をピークに団員数が減少を続けています。このことは、2～3ページの図表で示しました。埼玉県スポーツ少年団は、この現象を大変重く、大きな問題と捉え、2014年7月に「団員の増加策に関するプロジェクト」を立ち上げ、2015年4月までに7回の協議検討を重ねました。また、この間、県内各地の現状を把握し、団員の増加策に対するご意見やご提言をお聞きするため2014年のブロック本部長会議でテーマに取り上げ協議をし、本部員からも多くのご意見をいただきました。そうした経過を踏まえ、プロジェクトがまとめた「団員減少の原因・要因を探る」及び「団員増加策の提案」が第2章と第3章に示した内容です。

団員の減少は、子どもたちのスポーツ離れとも深く関係し将来を担う青少年の健康や体力・運動能力の低下にも大きく影響すると考えられます。だからこそ、団員を増やしたい、スポーツ仲間を増やしたい、友達といっしょにスポーツを通して集団活動を楽しんでもらいたいと埼玉県スポーツ少年団は考えます。

「一人でも多くの青少年にスポーツの喜びを」

「スポーツを通して青少年の心と身体を育てる組織を地域社会の中に」

「スポーツで人々をつなぎ地域づくりに貢献する」

というスポーツ少年団の理念を、私たちスポーツ少年団関係者はもとより、広く県民の皆さんにも知っていただき、子どもたちを地域のみんなで守り、育てていきたいと思えます。

*

「団員の増加策に関するプロジェクト」委員

委員名	佐藤 高弘	本部長
	神谷 裕之	副本部長
	岸 輝美	副本部長
	宮澤 達三	副本部長
	尾崎 豊	副本部長
	山下 實	指導者・リーダー育成委員会委員長
	関根 剛	企画広報委員会委員長
	野口 英夫	活動交流委員会委員長
	兵藤 明子	指導者協議会委員長

プロジェクト会議

2014年8/6、9/24、11/4、12/15、2015年1/23、3/12、4/28

2015年5月22日

編集・発行 公益財団法人埼玉県体育協会埼玉県スポーツ少年団

< 参考資料 >

スポーツ少年団とは

1、創設

1962年6月23日、「スポーツによる青少年の健全育成」を目的に日本体育協会創立50周年記念事業として創設されました。先の東京オリンピックの2年前で、オリンピックムーブメントの一環でした。

2、基本理念（3つの理念）

「一人でも多くの青少年にスポーツの喜びを」

「スポーツを通して青少年の心と身体を育てる組織を地域社会の中に」

「スポーツで人々をつなぎ地域づくりに貢献する」(2009年に追加)

3、スポーツ少年団活動の意義

発育発達期にある子どもたちにとって、スポーツを継続的に行うことは、精神的にも身体的にも望ましい効果が期待できます。また、将来へ向かって伸びていこうとする子どもたちの大きな支援となります。

スポーツ活動や文化・学習活動などを計画的に、地域を基盤とした集団活動として展開することは、子ども自身が自らの力を育てるために大変重要なことで、スポーツ少年団活動の意義もここにあります。

4、スポーツ少年団の特色

様々な青少年団体がある中で、スポーツ少年団は「スポーツを通して子どもたちの健全育成」をしようとしている点が特色です。また、単位スポーツ少年団活動を支える母体として母集団がある点も特色といえます。

スポーツ少年団は、子どもたちが自由時間に地域社会で幅広いスポーツ活動をグループ活動で行っている集団です。

5、スポーツ少年団の組織

地域にある単位スポーツ少年団、市町村スポーツ少年団、県スポーツ少年団、日本スポーツ少年団の4段階で構成・運営され、市町村、県、日本の体育協会や教育委員会などとも密接に連携しています。

6、スポーツ少年団活動の分野

中心となるスポーツ活動のほか、体力テストや学習活動、野外活動、レクリエーション活動、文化活動、社会・奉仕活動などがあります。心も身体も発育発達期にある子どもたちにとって、この時期にスポーツ活動以外の幅広い体験活動を行うことも、将来へ向けて大変有意義な活動です。